

# 小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

尾上 明代

## 4. 大きな一歩

このマガジンでは、被虐待児たちへのドラマセラピー治療について、A 児童養護施設で継続的に行った事例を連載している。主に具体的なストーリーを読むことを通して、ドラマセラピーという「対人援助」法について知っていただければと考え、プロセスを詳述してきた。

イチゴちゃん、リンゴちゃん、アンズちゃん、マツオ君、スギオ君、という5人の小さな「怪獣たち」と開始した連続セッション。前号では、私が酷くいじめられる設定のドラマが続く中で、イチゴちゃんが私の味方に転じた変化、そしてそれまで通りの楽しい家族ドラマの模様について書いた。

今号では、子どもたちの個別の変化とグループ全体の成長という点で、大きな前進があった5回目のセッションについて記述する。

\* \* \*

リンゴが体調不調で欠席したため、きょうは4人で行う。まず前回から始めたダン

スをする。やはりお互いの動きを真似して踊るミラーリングはあまりできず、それぞれがバラバラ、めちゃくちゃに踊っていた。このバラバラの踊りは、このグループの特徴を象徴している。自分の感覚を優先して、自己解放をしているかのような。ほとんどが、ダンスとさえ呼べないような、ただ動いたり走り回ったりしているだけだったが、それでも音楽がかかりみんなで動くことを楽しんだ様子だった。

このような決まってしまう同じ導入は、儀式的な役割を果たすので、その後は「いつものドラマをするんだ」という心身の準備になる。さっそく、私とのドラマ（ミラーリングと受容の即興ドラマ）を始める。やりたい子どもにやりたい設定・配役を提案させ、私が相手役を行う。

### イチゴと私（親友同士の役）

学校のお昼の時間、イチゴはおいしい給食、私は「ウンコ」を食べる。イチゴの設定通り素直にいっぱい食べていると、「臭い」と言って私をいじめる。いつものパタ

ーンだ。イチゴに「いじめ甲斐」を感じてもらえるように、私はわんわんと泣く。すると、本当にいい気味だという感情たっぷりに「泣け、泣けーっ！もっと泣けーっ！」と大きな声で言うので私はもっと泣く。とてもたくさん泣いたあと、少しは彼女の気が済んだかなと思い、「仲良くして！一緒に給食、食べよう。だって親友でしょ？」と言ってみたが許してくれない。

見ている観客たちからでさえ、「親友じゃないの？」と声がかかるが(このこと自体、興味深い。今まで、このような「ドラマの設定をきちんと把握して見ながら、それに基づいたコメント」が観客から出ることはなかったからだ。)それでもイチゴはドラマを修正しなかった。私が、「いっぱいウンコ食べて、いっぱい泣いて、もう死にそうだ」と言うと、当然の結果のように、イチゴは「死ね！」と言うので、私は死に、ドラマは終了した。

前回までのような、真に迫る殺気だった雰囲気や残酷ないじめの感情は感じられなかったが、友だちをやり込めたい気分は、強く伝わってきた。セッション後、施設職員の浩二さんは、「イチゴは、実際は学校では友だちがいないんです」と言った。詳しい状況はわからないが、親友とのドラマをやってみたいと思って初めに設定したイチゴの気持ちが理解できた。

イチゴのような生活環境で生きてきた子どもたちは、結果として学校でも、楽しい日々を送れることは少ないように思う。施設から通っているというだけで、いじめや差別がある可能性もあるし、本人のセルフエスティームも低いので、満足な友人関係が築けない。しかも勉強ができる、など良い意味で目立つことも難しい。イチゴは頭

の良い子どもなので、きちんと勉強ができない環境にあることは、本当に残念に思う。

### アンズと私のドラマ

次にアンズを誘ってみると、何と客席から出てきた。5回目にして初めてのことだ。今までは、みんなで行うドラマには参加しても、私と二人でやるドラマは毎回嫌がり、他の子ども全員が何度も私と行っても、いつも見るだけで、絶対に応じなかった。

アンズに役の設定を聞いてみると、初めは「普通の人」「知らない人」などと言っていたが、結局「隣の家に住んでいる人」ということになった。机をベッドに見立ててそこに横になり、アンズは寝ている。この隣人は、寝ながら時々ふざけてクスクス笑っているだけで、私が訪ねて玄関の呼び鈴を鳴らしても起きてこない。仕方なく私は自宅に戻り、寝ている隣人を窓越しに眺めながらドラマを展開させようと、大声で楽しそうに独り言を言ってみた。

「隣の家の人、寝てるのが見える。あ、笑ってる。楽しい夢を見てるのかな？」しかし隣人には何の変化もなく、そのままドラマは終わりにした。少し照れているのと、素直に私とコミュニケーションをとりたくない気分なのと、まだ創造性や即興力が育っていないのと・・・理由はいくつかあったが、これでもりっぱな「笑いながら寝ている隣人とのドラマ」ができたと思う。私とのドラマに出てきただけでも、彼女としては大きな一歩であった。

### スギオとマツオ

スギオとは、スターウォーズの戦いのドラマで混沌として終わり、次のマツオとも映画の決闘シーンになった。「真似だけよ」

と言ってもこの日は本当のけんかのようになっていたので、すぐに終わりにした。

### 浩二さん（鳥のチュッチュ役）と私（人間の子ども役）

そこで気分を変えるために、ちょっとした流れと展開のあるドラマを浩二さんと私が見せることにした。始まりは浩二さんに任せ、即興で演じる。場のお守りのように、毎回私が持参してグランドピアノの上に置いてある、カラフルなオウムのパペット「チュッチュ」（マツオが命名）を使い、その鳥役に浩二さん、私は人間の子どもだ。ちょっとだけ登場する怖い母を、マツオに頼むとすぐにやってくれた。子どもが怖い母親に怒られて、森に薪を拾いに行くストーリーで始まった。

子どもが森で出会ったその鳥は、「あなたみたいに、いろんな色で派手な男は嫌い！」と彼女にふられたのだと言って、落ち込んでいた。子どもは持っていたパンを鳥にあげて、「カラフルなあなたって素敵！」という女の子がきつと現れるから、と励ますと、鳥は元気を取り戻した。そのお礼ということで、鳥に薪拾いを手伝ってもらい、子どもは帰宅する。母親は、まだ怒っていたが、子どもは「いいや。今日は鳥さんと友だちになって、薪拾いも協力してもらったんだから。どうせお母さんはいつもあんなふう怒っているんだから、気にしないんだ」と独り言を言ったところで終了。

### イチゴ（母親、鳥のチュッチュ、北海道の女の3役）と私（子ども役）

イチゴはプロットを創りつつ私に指おひながら、自分は3役をこなしてドラマを進めていった。この創作は、ドラマのストー

リーとしても、長さとしても今までで一番大がかりであった。強い意志のもと不退転の勢いで突っ走って行くイチゴを、私が伴走したようなイメージだった。

子どもは母親の命令で、飼っている鳥にえさをあげていたところ、鳥は籠から逃げて飛んで行ってしまった。

子ども：帰って来てー！

鳥：いやだねーっ！ 家はつまんないからな。（部屋中、大きく動いて飛び回った後）  
もう追っかけてこない。北海道だから。

イチゴ：＜私への指示＞ハーハーして、〇〇市（A児童養護施設がある地名）から北海道まで追いかけてくるの。いっぱい時間かけて。（間）疲れて倒れて！それからいろいろ探してやっと思つてる。いろんな家をとんとんって探して。

子ども：（すべて指示通りに演じたあと、ドアをたたく真似）とんとん。

ここで、誰からも何も言われないのに、即座に観客が一人ずつ、北海道の民家の人たちになって協力する！ こういうところは、みんな即興ドラマに随分慣れてきたものだと感心した。

子ども：とんとん。ウチの鳥、見ませんでしたか？

民家の人1：見てませんね。

子ども：とんとん。ウチの鳥、見ませんでしたか？

民家の人2：見てませんね。

子ども：とんとん。ウチの鳥、見ませんでしたか？

民家の人3：見てませんね。

子ども：とんとん。ウチの鳥、見ませんでしたか？（4人目がドアを開ける）

あーっ！！ いたーっ！！

北海道の女：（ここから、とても「お芝居チ

ック」に、つまり、いかにもドラマのセリフを言っています、という感じで大声ではっきりと) 私の子よーッ! さっき拾ったの!

子ども:(やはり大声で、お芝居っぽく) 私の子よーッ! 本来はウチの鳥よ!

北海道:捨てたでしょ! そう言ってるわよ!

子ども:ううん。この子が勝手に逃げたの。

北海道:あんたが投げ捨てたって言うでしょ。かわいそうに。

子ども:ショック。勝手に逃げたのに、「投げ捨てた」なんてー。

もう少し、話だけでも・・・ウチの鳥とせめてもう一回、話をさせて下さい。

北海道:でも、この子は悲しがってるわよ。

子ども:ねえ、チュッチュちゃん。私がえさをあげたとき、自分から逃げて行ったのにさ、何であんなひどいこと言うのお?(優しい言い方で聞く)

鳥:何言ってるのーっ!!

子ども:こんなに遠くから探しに来たじゃない。家に戻ってきて!

鳥:やだー。あんな狭いせまーいところに閉じ込められて、もうイヤ。(ドアを閉める)

子ども:閉められちゃったから、ドア越しに話すけど・・・そっか。その気持ちわかるよ。狭いもんね。

鳥:もう聞こえないの。閉めちゃったから。

子ども:でも言いたいことがあるの。ここで一生暮らせる? 仲良くできそう?

鳥:聞こえないもん。

子ども:(独り言) じゃあ、あの女の人がかわいがってくれるんならいいかなー。

鳥:でも、私を連れて帰らないと、お母さん、家に入れてくれないでしょ。

子ども:でも狭いところに帰るのイヤだって言う、その気持ちわかるから。家に入れてもらえなくても、チュッチュのこと考えたらしょうがないや。

イチゴ:<私への指示>ねえ、帰って。

子ども:(〇〇市の家に帰る) お母さん。

母親:(玄関で怒っている) チュッチュは探したの? 捕まえたの!?

子ども:お母さん、聞いて聞いて。北海道にいたの。一生懸命追っかけて行って、そしたらー。

母親:(子どもが説明しようとしているのを遮り、セリフをかぶせて) 捕まえたのか聞いてるのッ! 捕まえたのか聞いてんのッ!!

子ども:ううん。でも、聞いて。どうしてかと言うとー。

母親:捕まえるまで帰るんじゃないと、言っただろ!!

子ども:でもチュッチュがね、ウチだと狭くて辛いつて言ったから、チュッチュのために諦めたの!

母親:・・・。(無視)

子ども:もういい。

お母さんが私を家に入れてくれなくてもチュッチュのためだから、しょうがない。

母親:(ドラマチックに芝居気たっぷりに) じゃあ、入んなさい! 入りたければ、今!

子ども:(嬉しそうに驚いて) 入れてくれるの!?

母親:(ふざけ笑い) 入れないよ。

子ども:ん・・・?

母親:間違えたの、ことば!! (観客一同爆笑)

子ども:(少し笑いを含みながら)

何だよ、ウチのお母さんは・・・。

母親:バチン! バチバチ! (いきなり子

どもをぶつ。もちろん真似だけ。)

**子ども**：痛い、いたーい。

**母親**：出て行きなさい！！

**子ども**：ごめんなさい、お母さんごめんなさい。(泣く)

**母親**：バタッ！（ドアを閉める）あなたは外にいなさい。(独り言) やつといなくなった。実は北海道の女は、このお母さんとグルだった。双子で離ればなれだったの。で、電話で「やったね、お母さん」って。

**私**：(素に戻って) じゃあ、ハッピーエンドだね。

**イチゴ**：お母さんとイチゴだけがハッピーエンドで、あんただけが、「イヤ～ン！！(ここだけ大声で怒鳴る)」って、なってんの！

**私**：イヤ～ン！ じゃあ、ハッピーエンドだね。  
(観客の拍手で終わり)

イチゴが創ったこのドラマにはどんな意味があるのか。これまでは、母親や子どもの役などを演じている「私」がいじめられたり殺される、というテーマと単純な場面設定で、ドラマの長さも短かった。それらに比べると、このドラマは単なるいじめではなく、筋や場面設定が複雑で、時間も長い。何より、これを創って演じきる！という意気込みが大変強く感じられ、他の観客は、そのエネルギーに飲み込まれるように見入り、ドラマのエキストラとして協力こそすれ、邪魔は誰一人一度もしなかった。このようなことは初めてであった。ストーリーを進めていく推進力も大きく、即興とは思えないほど、次々に私に指示をしながら、自分でも3役をこなし、迷うことなく

筋書きを進めて行ったことにも驚かされた。

(このドラマには、ストーリーと登場人物が、少しわかりづらい部分がある。イチゴの即興なので、一貫性がないように思えるところもあるが、その点はあまり重要ではない。)

このドラマの中で意味深いことが起きた、という確かな感覚を私は強く受け取ったのだが、その具体的な内容は、すぐには解明できなかった。ドラマの中身を分析して解釈することがいつも必要とは思わないし、解釈を試みても、それが正しいがどうかを証明することはできないことも多い。意味付けすることが、単なるセラピスト側の曲解や自己満足である場合もあるかもしれない。しかし、そのような可能性があることも十分わかった上で、セッションの詳しいプロセスの記述をしている今、あえて試みてみたい。もちろんその目的は、いかにクライアントが「ドラマ」という枠組に守られながら、真実の感情を投影して表現・解放し、シンボリック、メタフォリックに問題を乗り越え成長するのかを伝えたいためである。

このドラマの逐語セリフという生のデータに向き合っただけでも何度も繰り返し読み、ドラマ時の感覚を思い起こしながら、現時点の私が考察した結果が以下である。(よって立つ基盤は、何度かのドラマを介して知るイチゴの様子、彼女がこれまで演じてきた内容と今回示した変化の観察、そして相手役をした私の感覚である。)

### 一人三役の意味

イチゴにとって非常に大事ないくつかの感情と立場が、3人の登場人物(鳥、母親、北海道の女)を借りて表現された。

### ① ケアされたい、捨てられた鳥

鳥は、現在のイチゴ本人を象徴している。鳥が狭い世界（施設）から飛び立ちたかったことは、一つの事実だろうが、それ以上に大切なことは、安心できる優しい人に保護されたい、また行方不明になった自分をどんなに遠くてもハーパー走り回り苦労して探し出してほしいと願う感情だ。

自分から家を飛び出した鳥であったが、話が途中から捨てられた鳥に変化している。イチゴが狭い世界から飛び出したかったという気持ちより、「捨てられた」という感情の方が前面に出てきて反映していると思われる。

ここの局面での私（子ども役）の対応は、迷うところだった。ストーリーの一貫性がなくても、イチゴに合わせて捨てられたことにすればよかったか、または一貫性を優先させ、イチゴに合わせないで、自分で飛び出したことにするか。私は後者を選択し、狭い世界から飛び出たかった鳥の気持ちを理解するスタンスをとった。イチゴの話に合わせて、鳥を捨てたことを認めて謝る役でも良かったかもしれないが、いずれにしても、鳥に対するケアと愛情を示す飼い主の子どもを演じたので、その点では大きな違いはなかったかもしれない。

しかし、後から何度もセリフを読み返して、捨てたことを謝ってもらった方が、イチゴにとって良かったのではないかとも思い直した。現実のイチゴは、もちろん自分が出たくて家を出て施設に来たわけではないのだ。しかし、ここが難しいところで、捨てたことを謝ることが、「ドラマだから」可能だという考えと、このような彼女の現実を「ドラマなんかで」安易に創り変えて

はいけないという考えの間で悩むのである。過去のできごとであれば、「ドラマで塗り替える」選択もあり得るが、現在のイチゴの状況なので、易々と「捨ててごめんね」とは私は言えなかった。結局、謝るかどうよりも、飼い主の子どもが「母親に家から閉め出されるという罰を受けてでも、鳥の気持ちを優先するという愛情を示した」こと自体が良かったのではないかとも思える。この子どもが感情表明をしたことで、実は陰ながら深く自分をケアしてくれているのだということが、鳥にわかったからだ。

なにぶん、ドラマが始まってしまうと、その時々で、瞬時に選択・対応しなければならないので、そのときにゆっくり判断している暇はない。この種の仕事は、そのときの自分の直感を信じて行うしかなく、それで良かったのか、他の選択肢があったのか、などは後の自身の振り返りで、その都度考察していくしかない。

### ② 傷ついた自分をいたわる役の出現

このドラマで最も重要なできごとは、相反する感情を持った二つの役にイチゴが同一化したことであり、その後それらが統合されたのではないかと推測できる点である。

一つは、捨てられた鳥を可愛そうだと言って味方をし、保護する役（北海道の女）であり、もう一つは、自分の子どもを叱って外に閉め出す怖い母親である。後者は、今までの多くのドラマで何度も登場した、攻撃者・虐待者に同一化する役だ。（「私」をいじめたり殺したりした役）しかし、前回のセッションで初めて、いじめられている「私」を助ける教師の役が登場し、とうとう今回、被虐待者を慰め助ける役が、もっとはっきりと強い形で現れたのである。

しかも、今回イチゴが保護し助けた「鳥」は、イチゴ自身を象徴している役だ。被虐待児が、虐待者と同一化した感情のまま大人になると、次なる虐待者になるという、いわゆる虐待の連鎖が起こることがよく言われているが、そうならないために、上記のような「被害者を慰める」（つまり、弱い自分を認め、自分自身をいたわる）感情を被虐待児の中に育てることが大変重要である。米国のドラマセラピストたちによる、被虐待児とのセッションの報告にもあるが、そのような子どもたちとの治療の初期には、必ずセラピストをいじめ、やっつける役、誰にも絶対に負けない強い役が繰り返し演じられ、長い治療が進むにつれ、弱さを認める役や弱者をケアし助ける役が出現する。

i この役こそ、傷ついた自分自身をいたわり育むもう一人の自分であり、ドラマセラピストのルネ・エムナーが「内面に存在するはぐくみの親<sup>ii</sup>」と呼ぶ役である。イチゴが北海道の女を創り出したことは、まさに、このプロセスが起きたことを示し、彼女が慰める役とも同一化できたことがわかる。

このときに大変興味深く感じたのは、その役が「私の子よ！可愛そうに」というところで、イチゴが急に芝居気たっぷりの、大袈裟なセリフ回しをしたことである。それまでの、たとえば、私に「ウンコを食べろ！」などと言うドラマには見られなかった雰囲気だ。（前回のセッションで「あなたたち、いじめてるんでしょー。ダメーよ！」と、私の味方をしてくれた教師役のときも、まさにこの雰囲気のセリフ回しだったことに、今気づき、非常に興味深く感じている。）このいかにも「ドラマをしています！という感じ」は、自分自身の生の感情、あるいは、基盤になっている感情がその役を通し

て強調され、開示されてきているように思われた。普段、自分が言えないことば、人から聞けないことばを、演技の中で表現して、良い感情の刺激を受けていたのではないだろうか。このような大袈裟な演技やセリフ回しは、実はリアルな演技よりも強く演技者自身に影響を与えることもあるように思う。このような感情の外在化をすると、その印象が強く残り、同時に内在化を深めると思うからである。

もう一つ、「手が混んでいて」興味深かったのは、子どもに「出ていけ」といじめる母親ではあるが、そのいじめる理由、「可愛そうな鳥を連れ戻さなかったから」というところが、今までのいじめ役よりも進化（善良化）していたことである。

さらには、子ども役が、「お母さんが私を家に入れてくれなくても、チュッチュのためだから、しょうがない。」と言ったとき、母親役のイチゴは、「じゃあ、入んなさい！入りたければ今！」と叫んだことだ。あのとき、子どもが即座に家に突入していれば、きっと許してくれていたかもしれない。つまり、攻撃者としての悪役の意図、理由、態度が変化し、揺れているということがよくわかる。つい、そう言ってしまったのだ・・・！

### ③ 二つの役の統合化

そして、このドラマの「解釈」の中で一番、私自身が驚いたことは、最後の部分である。イチゴが同一化した二つの役（攻撃者と保護者）が、実は双子のグルだったと言ったところだ。「離ればなれ」だった二人が、電話で「やったね」と話し、合体して統合されたのである。初め私の考え過ぎかとも思ったが、やはりイチゴは、このドラ

マで見事に、健康的な回復に向けて大きな一歩を歩んだのでないか、と感じずにはいられない。

少なくとも、私に「ウンコ」を食べさせるドラマは、この日を最後に、その後二度と起こらなかった。

#### マツオ（床屋）と私（若い男のお客）

男：こんにちは。髪、切ってほしいんですけど

床屋：1000円です。（手を出す）

男：まだ切っていないのに？ 後で払うんじゃないですか？（と言いながらも支払う。）男らしくしてくれよ。

床屋：わかったよ〜。（照れ隠しか、とても変な言い方。）びゃ〜！（めちゃくちゃに切る動作）

男：（自分の髪を触って）この辺が乱れてますよ。男らしくしてくれって頼んだんだけどなー。これは似合ってるのかなー。坊主頭になってる。

床屋：思いっきり似合ってる。

男：ま、いいや。モテるかな、女の子に。

床屋：明日、学校に行ってください。

私：＜みんなに指示＞じゃあ、学校！

みんな：（即座に客席から全員立ち上がり、シーンに参加）キンコンカンコーン！

男：（教室に入っていく）お早う。

みんな：（口々に）わー、きもーい、きもーい。うえー、げー！

女の子たち：後ろにハゲって書いてあるよ。（キヤーキヤー言って、噂話をするように、固まって男の悪口を言う）

男：えっ！？ カリスマ美容師と思ったのに。ひでえ、あの床屋ー！！1000円も払ったのになー！ 文句言いにいい。（床屋に着く）トントン、

床屋さーん。今日、学校に行ったらみんなにキモイキモイって言われたんだ。

どうしてくれんの。金返してくれよ。1000円って俺には大変な金なんだよ。

後ろにハゲって書いてあるって。

床屋：はい。（返す）

（スギオが急に客席から、「それ、ニセ札なんだよ。」というアイデアでマツオに助け船を出す。）

男：あ、これニセ札じゃねーか。返して、返して。じゃなきゃ、やり直して下さい。女にモテるように。

床屋：（男の髪をカットする動作）これでチョー、モテるよ。

みんな：（絶妙のタイミングで、場はすぐに学校と化す）キンコンカンコーン！

今回のように、互いに打ち合わせることなくすぐに一致団結してドラマの筋を進めるところは、このグループの凝集性や子どもたちの自発性、創造性、即興力がついてきた証拠だ。何より、彼らが大変楽しい思いとともに、行っていることも重要な点である。

男：みんなお早う。

みんな：キモイ！（いろいろ言っていじめる）

ここで終了。マツオが、このようにドラマのストーリーの流れを創って「まともに」演じ続けられたのも、今回が初めてだった。彼にとっても、今日は大きな一歩であった。

この床屋のドラマは、子どもたちのお気に入りになり、このあと幾度となく演じ繰り返されることとなる。

この日のシェアリング（みんな感想を言う時間）も、特記すべき内容だった。

スギオ：マツオのが面白かった。



イチゴ：マツオのハゲのヤツが特に面白かった。あと、アンズの楽しかった。

スギオ 浩二さんの、いいお話だった。薪とか拾って元気になって良かった。

私は、「そうだね。二人で協力したところが良かったね。」とスギオに返したが、彼がこのような素直な子どもらしい「まともな」感想を言ったのは、初めてだった。

また私は、「役が必要なときにパッと誰かの役になって協力してくれたのが、いいことだよ。みんな良かったよ。」と伝え、みんなのドラマを褒めたら、子どもたちもお互い褒めあって、初めての本気で褒め合う（おふざけではない）シェアリングになった。こんなに良い雰囲気、なおかつ楽しいのは本当に初めてで、グループ全体の成長という点でも、やはり「大きな一歩」の日だった。

(次号に続く)

---

i James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C. (2005). Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment (pp.67-86). Taylor & Francis Group.

ii ルネ・エムナー、尾上明代訳 (2007)、ドラマセラピーのプロセス・技法・上演、北大路書房